

中大生の旅するチカラ

9

◇ やきものの魅力あふれる佐賀

日本の伝統工芸に触れる旅・産業観光◇

欧州へ輸出された美しい古伊万里
大海に出てその素晴らしさを知る

ヨーロッパの主要な博物館や宮殿を訪ねると、必ずと言ってよいほど、美しい絵付けがなされた日本の古伊万里や柿右衛門様式の陶磁器が保存・展示されている。これらは今から400年近くも前に、オランダ東インド会社の手によって佐賀の伊万里港から輸出されたものだ。絢爛豪華な絵付けに魅せられ、なかには金塊や兵士との交換で手に入れた王侯貴族もいたという。海を渡ったやきものは、中世ヨーロッパで権力と富の象徴としても珍重された。

さかのぼること17世紀の初頭、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役）のおり日本へと連れこられた李朝の陶工らの手によって、日本で

初めて磁器生産が始まったとされる。その舞台となったのが鍋島藩、今の佐賀県だ。有田や伊万里、そして唐津と聞けば、地名もそのままの誰もが知るやきものの産地である。窯業は藩の主要な産業となり、貢物や輸出で大きな利潤をもたらした。

世界を旅して初めて、日本の産業や文化、歴史の素晴らしさを認識させられるというのは皮肉な話だが、大海に出たからこそ気づくことは往々にしてある。

私が佐賀のやきものの虜になったのも、やはりヨーロッパの旅がきっかけだ。

旅行会社に勤務していた1991年、ゴールデンウィークの繁忙期にパッケージツアーの添乗員として駆り出された。エーゲ海をクルーズしてパリを堪能するコースで、参加者のなかには一組だ



千葉 千枝子

Chiba Chieko

■ちば ちえこ 観光ジャーナリスト。東京成徳短大・城西国際大観光学講師。1988年中央大学経済学部卒、富士銀行入行。シティバンクを経てJTBに入社。96年有限会社設立。運輸・観光全般の執筆、講演活動を行う。日本旅行作家協会、日本観光研究会等所属。著書に「JTB旅をみがく現場力」（東洋経済新報社）など。近著に「観光ビジネスの新潮流」（学芸出版社）がある。

け、パリで拳式予定のカップルがいた。まだ海外ウエディングが珍しい時代のもので、パリに到着してからは日系美容室への手配変更などを自らがオペレーションして、希望にあうよう対応した。

旅も最終日となった夜、ホテル近くのセーヌ川のほとりを歩いていると、新婦の友人でツアー参加者の一人とぼったり鉢合わせた。親友が今宵、彼と二人きりで楽しんでるのを邪魔しちゃいけないと、途中で別れてホテルに戻ってきたというほかの参加者はショッピング三昧で血眼な自由行動の夜だった。それでバーへお誘いして、二人でグラスを傾けながら仕事のことや互いの身の上話に及んだ。昼間、ベルサイユ宮殿で見た古伊万里についての知識が豊富だったので尋ねたところ、佐賀のご出身という。

帰国後も写真や手紙を交わすようになり、つい



鍋島藩窯公園を案内してもらい佐賀やきものの魅力に魅せられた

にはその年の冬、私は彼女に招かれて佐賀・有田の地を訪ねることになった。彼女は自らハンドルを握って、秘窯の歴史を保存・再現した鍋島藩窯公園や、やきものの神様が祀られた陶山神社を案内してくれたのである。それからというもの、佐賀のやきものに魅せられ、幾度となく九州の地へ足を運ぶようになった。彼女に薦められて収集した有田焼しん窯の「青花」というブランドは、紅毛異人の文様が特徴で、今も我が家の食卓を飾っている。



自宅毎日食卓にのぼる「青花」。中国語で「チンホワ」と発音し、藍色と白の染付の器を意味する（筆者私物）

**海の幸・山の幸を盛ってこそ映える器
やきものをテーマに食べ歩く佐賀の旅**

先日、佐賀県の職員に連れられて、県内西部をすみずみ視察する機会に恵まれた。羽田から空路約2時間、有明佐賀空港に降り立つと、佐賀平野に広がる畑には大豆が黒々と実り、海苔の養殖棚が水面に光る美しい有明海が一望できた。

めざすは、「唐津くんち」で有名な唐津の街である。唐（今の中国）へ向かう港口（津）を意味



中里太郎右衛門窯に残る古い登り窯に日本のやきものの歴史を感じる

するだけあって、肥前名護屋城跡など歴史的にも見どころが多い。呼子の烏賊から透けてみえそうな青磁の器もよいが、温もりを感じさせる唐津焼は煮つけや焼き魚を、より一層ひきたてる。料理を盛ってこそその器だけに、やきものの旅にグルメは欠かせない。

唐津では杵島炭鋳で一財をなした実業家の旧宅・高取邸を訪ねたり、著名な陶芸家である中里太郎右衛門窯を見学したあと、創業128年の歴

史ある佇まいの宿「洋々閣」へと向かい汗を流した。そこで夕食の席、主人（あるじ）の話を聞いて驚いた。日本円がまだ1米ドル360円の固定相場時代の、大学を卒業したばかりの主人は箱根宮ノ下の富士屋ホテルへ就職して、接遇のイロハを学んだという。出された料理も一流だが、もてなしも素晴らしい。何より館内に陶芸作家・中里隆の作品ギャラリーを擁しており、来る者の目を楽しませてくれる。ふと見ると、宿泊客の外国人もギャラリーを覗いて、やきものを見入っている。食事をはさんで、あらためてギャラリーで器を眺めると、観る心持ちが違っているのがわかる。

翌日、一路、有田へ向かった。ちなみに、有田の街を巡るには歩きやすく低い靴がよい。窯元で古くからある登り窯を見学したり、工房を訪ね歩くのに適している。耐火煉瓦を積み上げたトンバイ塀のある裏通りは、とてもひっそりしていて散策にもちょうどよい。

今回、ついで念願かなって、しん窯の工房を訪ねることができた。1830年、鍋島藩指導のもとに築かれたとされるしん窯で、青花匠といわれる伝統工芸士の方からお話をうかがい、工房で絵付けの様子を見学させていただいた。そしてあらためて、普段使う食器に愛着を感じた。飾るのもよいが、日々の暮らしのなかで活かされてこそが、やきものの命であり作り手の喜びなのではないかと感じたの

である。

工場萌えにみる産業観光の曙 やきもの収集なら小さな箸置きから

時代は今、陶芸ブームにある。陶芸教室に通うのは都会人がもつぱらだが、趣味が高じて窯元をめぐる、作家のもとに本格的な手習いをする人もいるらしい。しかし窯業は、旅館や料亭の時代的な減少とともに斜陽にある。そこで有田では「ふるさと創生」を目的に有志が集い、滞在型観光による上級者向けの作陶指導や若手アーティストの育成などを積極的に行う取り組みを始めている。2016年、日本はやきもの発祥400年を迎えるが、有田での体験交流型観光が、往時の活気を取り戻すことを祈る。

一つの産業を核にした観光のあり方を「産業観光」と呼ぶ。伝統的地場産業や近代的な製造業、



有田・しん窯の「匠」と呼ばれる伝統工芸士から登り窯の説明を受ける

先端技術の現場、産業遺産などを観光対象にしているのが特徴で、雇用の創出もはかれるためサステイナブルツーリズム（持続可能な観光）の代名詞ともいわれている。ものづくりの国・ニッポンの強みを活かした、新しい旅のカタチといえよう。産業観光で代表的なのは、「工場萌え」なる言葉まで生んだ工場夜景ツアーだ。夜間照明で輝くコンビナート地帯の夜景が、観る人の心をくすぐるらしい。川崎市をはじめ室蘭や四日市、北九州のほか兵庫の姫路や山口の周南も新たに参加する「全国工場夜景サミット」には、関心を寄せる自治体も多く、いずこも臨海部に立地することから夜景クルーズも好評だ。

学生身分なら、やきものの収集にはお金がかかり過ぎる。体験するにも技量が不安であれば、ギャラリーを覗いてホンモノを見る目を養えばよい。お気に入りの品をみつけたら、5客1セットでなくともバラで購入できるようにしている。近ごろは、販売する側も消費者の立場に立っているのがわかる。それでも、よいものは単価も高い。

私は若いころから旅先で、さまざまな箸置きを購入して、そのコレクションは軽く百を超す。ご朱印やスタンプも好きだが、箸置きはかさばらず高額でなく、自分へのお土産にちょうどよい。収集した一つひとつに思い出があり、来客時には、ちょっとした話題づくりになる。たった一つでよいから、旅の思い出に箸置きを購入してみるのがよいだろう。